

論語で中庸を

「子曰く、中庸の徳たるや、其れ至れるか

な。民鮮なきこと久し」

【雍也】

【子曰、中庸之為徳也、其至矣乎。民鮮久矣。】

〈孔子言つ、「過ぎることなく及ばぬこともなく、而も偏ることなく中正を得ること常に変わらぬ中庸の徳は人間道徳の至上のものだ。が、この徳を行える人が少なくなつて久しいことなあ」と。〉

つまり、中庸の徳は、常に過不及なく偏らない最上至極の徳ということ。孔子が論語で、このように中庸のことを説き、その中庸の徳を行える人が少なくなつていることを嘆息しているのです。

また、

「子曰く、中行を得て之に与せずんば、

必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者

は為さざる所有るなり」

【子路】

【子曰、

不得中行而与之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有

所不為也。】

〈孔子いう、「私は、過ぎることなく及ばないこともない中道にして正しい理想的な人を得て、事をもにした

いと思つ。が、なかなか得られないので、やむなく狂者・狷者を得て事をもにしたい。狂者は志が高く進んで善

を行おうとする気魄があり、狷者は断固として不善を行

わない節操があるから」と。〉

これもまた、中庸の徳の意味とそれを行う人こそ理想

の人だと説いています。

更に論語の最終二十篇では、

「堯曰く、咨爾舜、天の歴数、爾の躬

に在り。允にその中を執れ。四海困窮せ

ば、天禄永く終えん」

【堯曰】「堯曰、咨爾舜、天之歴数、在爾躬。允執其中。四海困窮、天禄永終。」

〈中国古代の伝説上の帝王堯が舜に帝位を譲ろうとしたとき）堯いう、「ああ、お前、舜よ。天位に就くべき順番は、お前の身にめぐつてきている。お前が私に代わつて帝位に就くべきだが、帝位に就いたら、過ぎることなく及ばぬこともなく、しかも一方に偏らない中正の道を守つてほしい。そして、平和で安心安全な社会が続き皆が生き生き活潑潑地で働き生活し、豊かな暮らしが続くよ

を執り行わなければならない。それが出来ず人々が困窮するようになると、天位は永久にお前から断絶してしま

うだろう、と。〉

このように、論語にも中庸の語句は使われています。

意味は、過ぎることなく及ばぬこともなく、偏らない徳を意味しています。

漢語林で「中」を調べると、「まんなか」、「あいだの中間」、「なかほどの平均」などの意味があり、日常にこの意味でよく使うのですが、論語で使われる意味としては、「ほどよい、かたよらない」という意味があります。こ

れが、いわゆる「中庸」の「中」の意味だと考えます。

更に、「中」には、「あたる」、「的中する」という意味があります。これをヘーゲルのアウフヘーベンになぞらえて説く人もいます。「A」という考えと「B」という考えがあつた時、それらを否定しながらも保存し「C」という最適な考えに高め止揚する意味も「中」にはあるとする考えです。三つ目の章句の「中を執れ」の意味には、

組織のトップは、ほどよく綱紀を整え偏らない組織経営をし皆が生き生きと働けるようにして、しかも財を産みだすような最適な政策を推進し、生じた財を分配し、皆が安心安全で豊かな生活できるようにしなければ、トップの座はおわれますよ、という意味も含まれると考えます。

また、漢語林で「庸」を調べ論語で使われる意味として考えると、「一定して変わらない」「かたよらない」という意味があり、これが「中庸」の「庸」でもあると考え

では、なぜ、孔子の孫子思は、『中庸』の書を作つたのでしょうか。

それは、子思の当時道が衰え私智・私欲・名利・私説が盛んになり、中庸の大本の「誠」が無いのを見て、惻隠及びざるの心から已むを得ず孔子の言も引用しながら中庸の書を作つたと言われています。事を行うに、学ぶに、表面的には立派でも、その真実中心の「誠」、中庸の

大本が無いのを見て憂え作つたのです。だから、「天の命

ずるこれを性といい、性に率うこれを道といい、道を修めるこれを教という」と、真正面から性の根源より中庸を説き明かしその大切さを説得力を増しながら解いているのです。ちなみに、論語にも「誠」の字はでてきま

すが、子思のいう誠の意味ではまだ使われていないことを念のため付け加えておきます。

今回は、このような、誠之館命名のもと「中庸」は、『論語』にも説いてあるのですが、その大本「誠」は論語には説いてなく、『中庸』に「誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり」として深く説いてある端緒を稚拙ながらお示しさせていただきました。

皆様のお導きをお願いします。